



Title	アフリカにおける国民国家形成とエスニック・ナショナリズム：ルワンダとタンザニアの事例から
Author(s)	西村, 篤子
Citation	大阪大学, 2005, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/45756
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	西村 あつ子
博士の専攻分野の名称	博士(国際公共政策)
学位記番号	第 19604 号
学位授与年月日	平成 17 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当 国際公共政策研究科比較公共政策専攻
学位論文名	アフリカにおける国民国家形成とエスニック・ナショナリズムルワンダとタンザニアの事例から一
論文審査委員	(主査) 教授 米原 謙 (副査) 教授 星野 俊也 助教授 木戸 衛一

論文内容の要旨

1994 年 4 月、ルワンダで起きた紛争は、人口約 800 万人の国でその人口の一割以上にあたる 100 万の人々が数ヶ月のうちに虐殺され、国内外に何百万人もの難民を流出させたという非常に衝撃的な事件であった。ルワンダにおけるこの紛争は 94 年に突発的に起きたわけではなく、59 年の「社会革命」、63 年の国内におけるフツのツチに対する迫害・虐殺、隣国ブルンディのクーデター事件の余波をうけて勃発した 73 年のツチの虐殺など、独立前後から繰り返されてきた紛争の延長線上に位置付けられるものである。90 年代初頭からフツ急進派が出現するようになり、94 年の大虐殺に発展した。

政治がエスニック的な様相を露にする以前のルワンダでは、エスニシティは一般人にとって、生活・文化的な価値観が強いものであった。しかし、エリートが自らの既得権益を守るために政治をエスニック化するようになり、フツ急進派が出現し始めることによりその性質は変化してきた。急進派が行った軍事力を伴う、ツチと稳健派フツ殺戮の煽動により、日和見的な価値観をもつ人々はアジテートされ、また恐怖感から虐殺に加担した一般人の存在も否定できない。ルワンダの 94 年虐殺では、多数のフツが、ツチと反体制派フツ撲滅を掲げるエスニック・ナショナリズムに扇動され虐殺に加担したのである。

一方、独立から 90 年代にかけて、比較的政治的に安定していた国がアフリカに存在する。それは東アフリカのタンザニアである。120 を超えるエスニック・グループから構成されており、宗教もキリスト教、イスラム教、土着の様々な宗教など多様であり、その気候・風土もそれぞれの地方により様々である。このように多種多様な構成員をもつタンザニアを、独立前後にかけて統合し、国民の間に一体性を形成し、ひとつのタンザニアネイションを構築したのが初代大統領ニエレであった。また、1980 年代の経済危機、90 年代の民主化要求の波という局面を迎ても、他のアフリカ諸国に比べると、タンザニアは比較的安定した社会状況を保っていた。

本論文では、アフリカの民族問題について、国民国家形成を民族問題との関わりで読み解くことを目的としている。その事例として、ルワンダとタンザニアを研究分野に挙げる。独立以降のエスニシティの政治化から 1994 年の虐殺という結果に陥ったルワンダのエスニシティ形成過程と、独立から国民国家形成の過渡期において比較的政治的に安定していたタンザニアの国民国家形成過程との比較を行う。両者の比較分析から、アフリカにおける国民国家形成とエスニック・ナショナリズムの関係を考察する。本論文の大きな目的は、ルワンダとタンザニアの比較そのものにあ

るというより、両者の比較を通して、アフリカの国民国家形成のもつ問題について考察することにある。

論文審査の結果の要旨

この論文は、1994年にルワンダで発生した民族対立による大量虐殺を、どのように理解するかという問題を出発点にしている。西村氏は、この問題をアフリカにおける国民国家形成の視角から捉え、ルワンダと隣接し、同じく民族問題を抱えるタンザニアと比較することで解明しようとしている。全体は6章からなっており、まず第1章では、ナショナリズム分析の二つの手法が紹介され、特にナショナリズム分析の代表的研究者であるアンソニー・スミスの「エスノ・シンボリック」的分析を応用して、ルワンダとタンザニアの比較の方法論が提示されている。

第2章では、ルワンダのエスニック・ナショナリズムの発生が歴史的に考察されている。西村氏はここで、「ツチ」「ツツ」というエスニシティの対立が植民地統治の過程で形成されたとする通説を承認しつつ、口頭伝承などを紹介・分析することで、植民地統治以前のエスニシティ意識の発生を跡づけている。

第3章と第4章は、タンザニアの国民国家形成と民族問題を扱っている。タンザニアは、ルワンダなどの隣国と比較すると、国内の民族対立が表面化することは少なく、暴力的な事件も際立つ少ない。なぜタンザニアが比較的安定した国民国家形成に成功したのかを、西村氏は建国の父・ニエレによる独特の社会主義をもとにした国家形成を分析することで説明している。それによれば、120以上の多様な民族を国民的に統合することに、政治的リーダーが多くエネルギーを注いだこと、換言すれば、エスニシティの差異を刺激せず、「共通の記憶」を創り出す施策を追求した点に求められるという。その背景には、絶対多数を握るエスニック集団が存在しなかつた事情が、国民統合にプラスに働いたとされる。第4章では、タンザニアの民族紛争の例として、ザンジバル問題が扱われ、ここでも民族問題の根幹となる人種・宗教・地域の差異が政治的な紛争に結びつかないように、注意深い政策がとられたことが証明されている。

第5章は、ルワンダの民族紛争を正面から取り扱い、紛争の発生原因を「エスニシティの政治化」という概念で説明している。タンザニアではエスニックな差異が政治と結合しないような政策が意識的にとられたのに対して、ルワンダではエスニック集団が政治的支配のために意図的にそれを利用した。西村氏はこのことを政治史的な事実を踏まえて丁寧に論証している。そして第6章の「結語」では、以上の論旨をまとめて、「エスニシティの政治化」を抑制したタンザニアとそれを高揚させたルワンダの相違が要約されている。

アフリカ研究は、日本では十分な環境が整っているとはいえない。研究者の数が多いとはいはず、資料も未整備でアクセスも容易ではなく、現地調査も治安の関係で思い通りにはいかない。こうした困難な研究条件にもかかわらず、西村氏は英国・ベルギー・ルワンダ・タンザニアで資料収集を行ない、スミスの「エスノ・シンボリック」的分析を範として、ルワンダとタンザニアの国民国家形成の比較という視角から、アフリカの民族紛争に取り組んだ。その能力は高く評価され、審査委員会は一致して、提出論文が博士（国際公共政策）の学位を授与するに値すると判断した。